私の経営経済学四十五年の反省

室谷賢治郎

今回，緑丘学園につながる各位が研究論文を持ち寄って，私の小樽商科大学奉職40有余年の退職を記念するための商学討究特集号を発行する運びとなった。学界に籍を有つ私にとって，これほど光栄のことはない。諸彦の驥尾に附して，私も経営経済学徒としての反省を綴り，この新興の科学の前進に願はくは道標を置いて見たい。

回顧すると，私が今の一橋大学の前身東京商科大学の学生時代に，この学問について故法学博士上田貞次郎教授（1879–1940）の講筵に列なったのは，大正9年（1920年）のことである。その時から起算して今日現在は，45年経過したことになる。「経済学五十年」(1)を詳らかに語る東大名誉教授，経済学博士大内兵衛氏や，「経営学五十年の展開」(2)を説く神戸大学名誉教授，経営学博士平井泰太郎氏には数年及ばないけれども，日本の社会科学の歴史的背景にかんがみれば，ほぼ同時代に属すると言って差支えないと思う。

「経営における五十年の進歩」 *Fifty Years Progress in Management* と題して索引を含め330ページに亘る巨篇が，アメリカで1960年に公刊されたけれども(3)，これはアメリカ機械技師協会 ASME (American Society of Mechanical Engineers) が提供した報告を10年毎の累積の形式で，1910年乃至1960年に示された経営の技術及び科学の発展を編述したもので，云わば事典に類する精密な資料である。そしてこの場合に取扱われている年代が，また私自身取組んで来た過去と相距ること甚だ大でないと見て宜かろう。

上田貞次郎博士は，わが国の経営学徒ならば誰れしもが知る通り，日本で経営に関する研究を，経済学的に最初に始めた先駆者の第一人者で，既に明治

40年代に国民経済学と引離して商事経営学を独立の学科に体系化しようと努力された[4]真摯篤実な学者である。併し，博士自らの言明によれば[5]，そのことは「不可能かつ不必要であると感じ，一般経済学の広汎な立場から企業を見る」のが博士の商工経営論と名付ける学科となったのである。従って私の聴講した年次の上田博士担当の商工経営の内容は，ドイツ学者シュモラー G. Schmoller の大著『一般経済学原理』 *Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre* の中の「企業」に関する章の紹述と，イギリスの産業革命以降の労資問題の解明とを主眼とするものであった。前者については，後年上田博士の高弟故増地庸治郎博士（1896–1945）が『シュモラー企業論』の訳書を出版したけれども[6]，これは上田博士が当時の増地助手に勧奨して校訂した所産に他ならない。而も上田博士は引続き増地助手と増地氏の学友槇原覚商学士との共訳でリーフマン R. Liefmann の『企業形態論』 *Die Unternehmungsformen* の第二版を公刊させて，再び序文を執筆しておられる[7]。

また私共が上田博士から受講した時の後半に当る産業革命に関しては，当時の小樽高等商業学校・山口高等商業学校並びに文部省や協調会の講習会においても招聘を受けて出講し，それの整備された著が『英国産業革命史論』となって洛陽の市価を高めたものである[8]。この名著は，イギリスのアーノルド・トインビー Arnold Toynbee（1852–1883）の不朽の遺作『第十八世紀におけるイギリスの産業革命』 *The Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England* が世界の識者を啓発したと同様に，日本の学界に刺激を与えるところ少なくなかった。さればわが国で破天荒ともいうべき出版計画を昭和初期に敢行した改造社は，全62巻の経済学全集の一巻を上田貞次郎著『産業革命史』[9]に充て，『産業革命史論』を第一部に収め，博士の別著『産業革命史研究』[10]をその第二部に配している。

ところで，私共が一橋橋畔の赤煉瓦の建物で興趣深く拝聴した上田博士の商工経営の講義は，昭和4年千倉書房発行の『商学全集』の中に『商工経営』の書名を以て公にされ[11]，超えて昭和12年東洋出版社発行の『経営学

全集』の中に『経営経済学総論』の名を冠して一般に弘められた[12]。玆に『経営経済学総論』の上田博士執筆の序から，次の一，二箇所を摘記して置く必要を感ずる。

「顧みれば著者が始めて経営学の建設に志したのは今から35年前東京高等商業学校に在学した頃であった。最初の欧洲留学から帰って同校に『商工経営』の講義を開いてからでも，既に28年になる。当時は欧洲においても二，三の国に商科大学が始めて設けられ，少数の学者が経営学の旗揚げをなした時代であって，その研究は形式・内容ともに頗る不備であった。バーミンガム大学のアシュレー教授の学風は著者の最も多く共鳴したところであったが，或時独逸の経営学につき色々話し合った際に，「経営学は何れの国でもまだ少しも一定の形態をなしてゐないのだから，君も他人の真似をせずに独創的に考へたらよからう」といはれたことを今日も記憶してゐる。かやうな次第で，経営経済の研究及び教授が，日本でも外国でも非常に盛んになった今日に至って昔を顧れば，実に隔世の感がある。著者はこの長い年月経営の研究にたづさはりながら，僅かに本書に示す貧弱な成績を収むるに過ぎなかったことを慚愧に堪えないのである。しかし以前には外国の状態が右の如くであったのみならず，我国でこの学を講ずるものは久しい間自分一人しかなかった。その上我国の学界に人が少なかったので，不肖の如きもこの一学科に専念するを許されず，自分の興味は却って経済政策及び社会問題の方に惹付けられることが多かったのである。

（中略）読者は本書により全部を学ばんとする態度をすて，本書の中から自己の研究上のヒントを得るやうにしてもらひたい。特に経営経済学の如き新しき学問は，学習すべきものでなくして研究すべきものだといふことを自覚してもらひたい。

（中略）著者は今から7年前に商科大学における自分の講義の草稿をまとめて，『商工経営』といふ表題の下に出版した。本書はその表題を改めたけれども，実質的には別著ではない。しかし第一章，第二章は殆ど全部を書き

改め，又全巻を通じて加筆したところが頗る多い。」

私は今にして Metropolis Tokyo の都心に当る一ツ橋の大学——英語に直訳すれば Onebridge University——で，日本経営学の創建者上田貞次郎先生の馨咳に接し，先生の「読書・見学・会談・討論・黙想の成果」を摂取し得たことを限り無き幸福と感ずる。唯だ，この学界の大先輩に対し応えることの乏しかったことに汗顔して寛恕を乞ふのみである。改造社から分離独立した東洋出版社が既に全22巻の会計学全集，全12巻の基礎経済学全集を刊行した後，昭和9年上田先生を監修者とする全25巻から成るわが国最初の経営学全集を発兌した時，上田先生は私に総論篇の中の第7巻『経営金融論』を執筆するように指示されたが，命によって完稿公刊された私の成果は(13)，旧師の学恩に酬い得るものか否か頗る疑わしいのである(14)。

さて私が大正12年（1923年）の春，一橋の同窓会員新入の歓迎会の末端に列なり，橋畔の如水会館大ホールの一夜を忘れ難い思出として，郷土北海道における唯一の専門学校たる小樽高等商業学校の教壇に立つこととなったとき，赴任匆々に担当を委嘱された授業は，商工経営・商業史及び原書講読（分科と称した）の三科目であった。商業史のことは姑く描いて，商工経営の講義は邦書で参考書も見当らない頃であったから，講義案の準備には並大抵でない苦悩を嘗めたことを告白せざるを得ない。分科には学校の教務部から予め A. Marshall: *Economics of Industry*(15) を使用する様にとの指示を受けたが，往時の日本の官立学校では新米の学士の講師に，これだけの負担をさせる実情であったことを書き留めて置かなければならない。両三年後，上京の折如水会館のロビーで上田先生に，担当科目のことを話したところ，先生から「よくもそれだけ持てますネ」と諷刺されたことを覚えている。

小樽高商では，私の赴任前に商工経営の講義を担当した教官は，どのような内容を盛っていたのかと言えば，私の赴任と行違いに在外研究に出発された佐原貴臣教授は，マーシャルの大著 *Industry and Trade*(16) を紹述し，その訳書を故国への置土産としたのであった。佐原教授の前任の担当者に遡

ると，アメリカの科学的管理法をわが国で逸早く紹介した国松豊教授がおられる。先覚国松教授は小樽高商創立の時以来の名教授で，創立10周年の記念式典を終えるや，校長渡辺龍聖博士と共に新設の名古屋高商へ移った方で，経営に関する著述にはわが国の古典たるに値するものが見られる[17]。

翻って私自身の小樽の港湾を見下す商学の殿堂で，学生に対して行なった講義について告白すれば，初年度（大正12年度）は企業形態論を述べるだけで精一杯で，それも上記のリーフマン流の解明を施す以上に出ることは出来なかった。先輩東京商大の増地庸治郎教授の著書『企業形態論』[18] の出版されたのは昭和5年（1930年）のことであるし，ドイツのニュールンベルク商大のフィンダイゼン F. Findeisen 教授の労作『企業形態論』[19] を入手し得たのも，偶々同年私がベルリンに滞留して居た頃のことで，何れも参酌し能わなかったことは勿論である。企業形態の問題は，平時ならば民間の私企業を解説することに重点を置いて差支えないであらうが，非常時体制を要請されるような事態の下にあっては，再考三思の余地が出て来る。この点に触れ，私は戦時中若干の論策を発表する機会を与えられた[20]。

皚々たる白雪に埋もれた冬を送り，黒土の蘇る緑丘学園の第二年目を迎えた時，私は商工経営の新学年度の講義案に，ドイツのベルリン商大のニックリシュ教授 H. Nicklisch の『経営学』1922年第5版[21] を紹述する計画を樹てたが，これは講義の進度を徒らに遅らすのみで，消化不十分を自覚し，時間数の半ばに達する前に，前年の企業形態論を圧縮して続ける仕儀となった。ニックリシュのこの原書は，初版を1912年に上梓し，文献史上ドイツ経営学の端緒を開いたもので，その前年の1911年に出版された同大学のシェーヤ教授 J. F. Schär の『一般商業経営学』[22] と共に看過することを許されない業績に属するとは，今や学徒の周く知るところに属する。因みに，1911年はアメリカでテイラー F. W. Taylor の『科学的管理の諸原理』[23] が公刊された画期的な年に当り，この年（明治44年）わが緑丘学園に小樽高等商業学校が明治日本における官立第五の高商として創立されたことも意味の無いこ

とでないと考える。

春永なえの緑丘教壇第三年の私は，講義案の内容を全く一変し，ドイツ流の経営学と暫く離れて，アメリカ流のマーケティング原理に転じて見た。既に *Marketing* と銘を打った書物が陸続とアメリカからわが国に渡来する状況であったから，私は講義に新機軸を出す意図の下に，先づマーケティングの基本的な原書にクラーク Fred. E. Clark の *Principles of Marketing*[24] を持出した。併し Marketing という語そのものには，日本に未だ適当な訳が附けられていなかった頃のことであるから，私は教室で学生に対し「マーケティングは当分訳さずに，そのままマーケティングと唱えることにしたい」と声明する有様で，学生は校外で戯れに「室谷先生の頭を叩いて見れば，マーケティング・マーケティングの音がする，ヨイヨイ」と囃す程の空気であった。マーケティングが配給——分配供給——として学界で一般に通用するようになったのは，昭和に入ってからのことである。

かかる生硬未熟な私の講義を教室で受けながら，自ら研鑽を積んで今や日本経営学界におけるトップに立つ人が，西野嘉一郎博士であり，山本安次郎博士である。西野君が処女作『事業財政分析観察法』を公にした時，私はその新刊紹介を執筆し[25]，また西野君の『近代株式会社』の著についてもブックレビューを怠らなかった[26]。山本君の処女作『公社企業と現代経営学』に対しては，私は前記の拙稿「公社論」の篇中に引用したことがあり，山本君から両三年前に私信で「小樽で種を蒔かれ，彦根で花を咲かせ，京都で実を結ぶ」山本経営学の生成を告げられたとき，改めて私一個が「一粒の麦死する」自覚を抱いたわけである。

少し横道に逸れたが，大正15年（1926年）度の私の第4回目の講義案は，舞台を新大陸から再び旧大陸に旋廻して，アメリカ流のマーケティングから，イギリス流の産業組織論に向けた。実は前年度の終頃から始めた次第であるが，J. M. Keynes 監修の Cambridge Economic Handbooks の中で，D. H. Robertson 担当執筆の著 *The Control of Industry*[27] の産業組織探求

の approach の仕方に，特殊の興味を誘はれた。同じシーリーズの E. A. G. Robinson の著[28]は，別に原書講読の時間に採用して， Robertson の立場と比較，論評を加えた。

大正15年は，日本の経営学界にとって一つの時期を画した年と見て宜い。それはこの年，わが国の教職に在る者と実務の経営者とが協力一致して商学・経営学研究のための学会を創立したことと，経営経済学の名称を冠した文献が始めて公刊されたこととを指すのである。学会は7月10日東京丸の内生命保険会社協会において創立会議を開催し，上田博士他4名の発起者の作製した会則原案に基いて審議した。この創立会議には，私も小樽から出席したが，出席者は全国官立・私立学校25校の学科担当教員45名であった[29]。議事の進行中，学会の目的・事業等についての規定は，殆んど原案通りに円滑に決定されたけれども，会名に関してのみは，日本商学会とすべきか，日本経営学会とすべきかで大いに討論が交され，約2時間の後，投票を求め，27票対12票で日本経営学会の名称に落着した次第であった。かくして成立した学会は同年11月下旬東京で第1回大会を開き，会計士制度に関する報告会を一般公開で催し，更に公開講演会をもった。その年報が『経営学論集』である。因みに学会の会員数は，名簿（昭和2年1月25日現在）によれば342名で，これを昭和40年11月1日現在の1,160名と比べ，転た今昔の感に堪えないものがある。

同じく大正15年の事績として逸目してならないのは，『経営経済学序論』[30]と銘を打たれた新著が，増地庸治郎氏によって公にされたことである。増地氏がこの労作の序文において明言する通り，経営経済学はわが国においては「著書の表題としても，大学に於ける講義科目としても未だ嘗て用ひられたのを知らない。而して名称は単に称呼の問題に止まらずして，内容の問題である。名は実の賓でなければならない。」この線に沿うた文献は，昭和4年の向井鹿松氏著『経営経済学総論』及び池内信行氏著『経営経済学の本質』であり，昭和5年の佐々木吉郎氏著『経営経済学の成立』である。

池内・佐々木の両先達が独逸の伯林大学の教室で聴講する姿を，私は屢々見かけ話し合ったのであった。

玆に大正15年（1926年）は，わが上田博士が最も同調されたイギリスのアシュレー教授が『経営経済学』*Business Economics*[31] と名付ける一書を公刊したことに注意を払はなければならない。良識の上に洗練を加えた典型的なイギリス学者アシュレー（1860–1927）は，而立の齢を境に既に名著『英国経済史及び学説』[32] を公にし，不惑の齢には稀覯の労作『歴史的経済的展望』[33] を世に示し，ドイツ歴史学派の経済学を大成したシュモラーに対して，云わばイギリス歴史学派の第一人者たる風格を表わした。そのアシュレーは1901年にバーミンガム大学の商学部教授に任ぜられるや，経済学の現状に慊らず，これを拡充すべきであると論じて，在来の政治経済学に対する経営経済学を樹立しなければならないと力説するのである。従ってアシュレーは，経営経済学において主として企業を取扱い，これを資本調達と外部市場とに関連せしめての『経営政策論』"Business Policy" と，内部活動に関連せしめての『経営管理論』"Business Administration" との 2 部門に大別するのである。1926年出版の著書は，アシュレーが偶々デンマークの首都コッペンハーゲンの商科大学で招聘を受けて講義したものであるが，序文に記されている通り，それは久しくバーミンガム大学で教えて来た学科課程の線に沿うものである。著書の分量としては僅か 71 ページの小型本であるが，「熟読玩味しなければいけない」と上田先生は私に諭されたことである。読後の私の印象の一つは，「学問に国境なし」と言うけれども，「学者には国境がある」といふことであった。そのわけは，アシュレーが独逸流の私経済学 Privatwirtschaftslehre や経営学 Betriebslehre の名称が余りに排他的に会計的臭味を帯びるので好ましくないと断言しながら，而も直ぐにその舌の根の乾かぬ先に，原価計算の重要性を高調するあたりの態度が，英独間の第一次大戦が終ってまだ10年を経過していない頃としても，私には納得し難いのである。併し，この点にこそ経営学と会計学との吻合を覚ることも認められ

るのである。

アシュレーは1926年この *Business Economics* の他に，「商業教育」に関する好著[34]を遺し，翌年キャンタベリー Canterbury の隠退先で刻苦精励の生涯を平和の裡に閉じた。次に記す *Business Economics* の結語は，既に経営学の将来を明示するものとして，感銘深く覚える。

企業外面の経営政策 "Business Policy" の研究も，内面の経営管理 "Business Administration" の全領域も，要するに，「素材は実際生活から蒐集せらるべきであって，その指し示す結論は確認された経験によって提起せられ，且つ合理的に説明せらるべきである。このことが成されるとき，経営経済学は有能な実業家の養成に貢献するであらうし，それ自体興味ある智識体系を形成するであらうし，更に純真な精神的訓練となるであらう。」

アシュレーの伝記を息女アンヌ Anne が編纂し，英国国会議員ボールドウィン Stanley Baldwin の序文とバーミンガム大学名誉教授ミューアヘッド Muirhead の一章とを添へ，1932年に出版した書物[35]について繙くと，アシュレーの葬式の際には，特にスエーデンの大僧正が参列し，長い歴史のある都会キャンタベリーの古色蒼然たる伽藍で，故人の中世期への関心や祖国愛を追懐したことは極めて象徴的であったと記されている。併し故人が過去にのみ興味をつないでいたと見るのは不十分で，寧ろ国民的障壁によって妨げられない大きな世界に故人は眼を放っていたと，伝記の作者は注意を喚起している。さればこそ同じキリスト教ではあれ，外国の他宗派の黒色に包まれた式服が，英国僧侶の白色礼装の中に混って一点目立った光景も印象深く，稍アクセントの異る声で明瞭に「往事は消滅した。わが万事を新しくするのを看よ。」と教訓を読み上げたと結ぶのである。アシュレーの経営経済学の自信に満ちた構想は，彼の「功利的諸研究に適用された人道主義的精神」"the humanistic spirit applied to utilitarian studies" を商科大学の目的とする見解に裏付けされるものと理解するとき，経営学が単なる致富，皮層の蓄財の研究に駐まるものでないことを強く訴えたくなるわけである。

時は移る。大正は15年を一週日剰したのみで，昭和に入った。私の経営経済学の反省は，それからでも四十年，云わば親子の年代になる。本誌の紙幅と執筆の時間的制約のため，今回の稿は尻切蜻蛉の慊いがあるけれども，以上を編集委員伊藤森右衛門教授の手にお渡しする次第である。改めて続稿のペンを握りたい。　　（昭和40年12月）

注(1) 大内兵衛著『経済学五十年』上（1950年5月，東京大学出版会発行）下（1959年6月，同会発行）

(2) 平井泰太郎著『経営学五十年の展開』（39年度『企業経営基礎コース』テキスト別冊，全国地方銀行協会発行）

(3) *Fifty Years Progress in Management: 1910-1960*. Copyright 1960, The American Society of Mechanical Engineers.

(4) 上田貞次郎著『株式会社経済論』（大正2年11月初版，大正10年4月改訂増補第六版，東京富山房発行）

(5) 上田貞次郎前著改訂増補版の序文。

(6) シュモラー著，増地庸治郎訳『企業論』（大正10年12月，東京下出書店発行，改訂大正15年7月，東京同文館発行）

(7) リーフマン著，増地庸治郎・槇原覚共訳『企業形態論』（大正11年12月，東京同文館発行）

(8) 上田貞次郎著『英国産業革命史論』（大正12年1月，東京同文館発行）

(9) 上田貞次郎著『産業革命史』（『経済学全集』第三十九巻，昭和5年2月，東京改造社発行）

(10) 上田貞次郎著『産業革命史研究』（大正13年4月，東京同文館発行）

(11) 上田貞次郎著『商工経営』（『商学全集』第五巻，昭和5年11月，東京千倉書房発行）

(12) 上田貞次郎著『経営経済学総論』（『経営学全集』第一巻，昭和12年12月，東京東洋出版社発行）

(13) 室谷賢治郎著『経営金融論』（『経営学全集』第七巻，昭和10年8月，東京東洋出版社発行）

(14) 鍋島達稿『室谷賢治郎教授著，経営金融論』（『経営経済研究』第二十冊，昭和11年，同文館発行）

(15) Alfred Marshall, *Elements of Economics of Industry, being the First Volume of Elements of Economics.* MacMillan and Co., London. 1st

Ed. printed 1892. 3rd Ed. August 1899. Reprinted 1922.

(16) Alfred Marshall, *Industry and Trade. A study of industrial technique and business organization; and of their influences on the conditions of various classes and nations.* MacMillan and Co., London. 1st Ed. 1919. 3rd Ed. 1920. Reprinted 1921.

邦訳　佐原貴臣訳『産業貿易論』（大正12年，東京宝文館発行）

(17) 国松豊著『科学的管理法綱要 ——能率増進の原理及び応用——』（大正12年2月，東京厳松堂発行）

国松豊著『工場経営論』（『商学全集』第十六巻，昭和6年1月，東京千倉書房発行）

(18) 増地庸治郎著『企業形態論』（『商学全集』第六巻，昭和5年3月，東京千倉書房発行）

(19) Franz Findeisen, *Die Unternehmungsformen als Rentabilitätsfaktor.* Bücherei für Industrie und Handel Band IV. Berlin, 1924.

(20) 室谷賢治郎稿「公社論——公社の現実と課題」（昭和19年6月，日本評論社発行，経営経済研究会，増地庸治郎編『企業形態の研究』所収）

室谷賢治郎稿「企業の再編成と国家管理」（昭和20年2月，千倉書房発行，滝谷善一博士還暦記念論文集第二巻『戦争と経営及び経理』所収）

(21) H. Nicklisch, *Wirtschaftliche Betriebslehre.* 5. Aufl. *Der Allgemeinen kaufmännischen Betriebslehre.* Stuttgart 1922.

(22) J. F. Schär, *Allgemeine Handelsbetriebslehre.* Leipzig 1911. 4 Aufl. Leipzig 1921.

(23) Frederick Winslow Taylor, *Principles of Scientific Management.* 1911.

(24) Fred E. Clark, *The Principles of Marketing.* New York, 1921.

(25) 室谷賢治郎稿「西野嘉一郎著，事業財政分析観察法」（昭和9年9月発行『経営経済研究』第十七冊）

(26) 室谷賢治郎稿「西野嘉一郎著，近代株式会社」（昭和11年2月号『会計』第38巻第2号）

(27) D. H. Robertson, *The Control of Industry.* London, at the University Press, 1923.

(28) E. A. G. Robinson, *The Structure of Competitive Industry.* London, at the University Press, 1931.

(29) 日本経営学会編纂『経営学論集』第一輯，（昭和2年3月，東京同文館発行）参照。

(30) 増地庸治郎著『経営経済学序論』（大正15年12月．東京同文館発行）

(31) Sir William Ashley, *Business Economics*. London, 1926.

平井泰太郎訳著『アシュレイ経営学概説』(昭和11年9月，東京同文館発行，平井泰太郎撰，経営学名著研究 第二冊）は原書の全訳の他，本文の前後に序説・解題・附録・索引・挿絵を添加して懇切周匝，殆んど完璧と言っても宜い良書である。

(32) W. J. Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*. Part I. Middle Ages. 1st ed. London, 1888. Part II. The End of the Middle Ages. 1st ed. 1893.

野村兼太郎訳『英国経済史及学説』(大正11年7月，東京岩波書店発行)

(33) W. J. Ashley, *Surveys, Historic and Economic*. London, 1900.

(34) W. J. Ashley, *Commercial Education*. London, 1926.

(35) *William James Ashley, a Life* by his daughter Anne Ashley with a chapter by J. H. Muirhead and a Foreword by the RT. Hon. Stanley Baldwin, M. P. London, 1932.